

無縁社会

住職

「無縁社会」という新語が世間に幅を利かせています。仏教用語では、「慈悲」の深さを「小悲・中悲・大悲」に分けて、「大悲」を「無縁の大悲」といいます。

救う相手を選び好みせず、条件もつけず、全てのものを平等に救うと



いう阿弥陀さまの大きいなる慈悲のことです。人間の能力素質は千差万別です。救われるための条件を我々につけますと、救われるものと救われないものができます。全てのものを救おうというのが阿弥陀さまの願いですから、その大悲を「無縁の大悲」といいます。「無縁」の語は「救う手がかりを持たないもの」という意味で使われています。

また、「縁」によつて全てのものは成立し、存在しています。縁が無ければ社会もありません。この点からいえば無縁社会ということばは現実を無視したものです。

かつて、「自由と平等」を「何をしても自由だ、みんな平等だ」と受け止めるだけに止まり、そこには「義務と責任」のあることを見落としていた時代がありました。

「個人主義」もこれと同じように受け止められたように感じられます。個人主義は個人の存在を大事にすることです。誰でも持っている基本的

な考えですが、自分だけが幸せになることでもないし、自分だけの世界に閉じこもり孤立することでもありません。

「無縁社会」という語は「誰も自分を支えてくれない、自分は一人ぼっちだ」という孤立した状況下で使われているようです。「無縁」ではなく「無援」の意味になっています。これは過度の個人主義が当然陥る世界です。

人間は本来孤独なものです。一人では大きな物事には立ち向かえません。だからお互いがお互いを支え助け合うために人間社会があります。我々が生まれ生きていく事実として、「無縁」ではありません。

経済的に豊かになるにつれて、我々は他人の力を借りなくても不都合はないと錯覚しているのではなからうか。その結果、他人との関わりをなるべく持たないようになろうと思うようになってきたように思います。それで孤立した自分だけの世界を作り閉じこもる。その結果、自分一人ぼっちだと思ひ込むのです。

東北の被災地を歩いて

信行寺 二男 米田 正樹

私は、十七年前、阪神淡路大震災で被災しました。お寺は全焼し、やむなく小学校での避難生活を約三ヵ月間送りました。その時のことを考えると、今回の東北大震災が、他人事のように感じませんでした。いつか、現地に行って現状を知りたい、何かできることがあればやりたいと考えていました。

しかし、夏休みも土日もクラブ活動があり、なかなか行く機会には恵まれません。

そんなことをしていたらこのままずっといけないと思ひ、娘をつれてテスト前の土日で行くことに決めました。

被災地に立つ米田正樹さん

東北と聞くと、

はるか遠くに感じますが、飛行機に乗るとあっという間でした。気候はこちらと比べると、少し寒く感じる程度でしたし、空港は奇麗に整備され、報道などで見ていた泥だらけの空港の様子は全くなく、神戸との違和感を感じることはありませんでした。しかし、石巻方面に向かうと、景色は一変しました。ほとんどの家は基礎だけを残し、なくなっていました。何とか残っている家も、一階部分はかなりの損傷を受けていて、建っていることが不思議なぐらいの建物が沢山ありました。映像で、同じような状況を見たこともありましたが、現地と映像との違いは、「におい」でした。私自身が、震災時に一番感じたのが、焼けただたにおいの強烈さをいつまでも忘れませんでした。今回もこの「におい」と共に現地の実態を見ることで強烈なインパクトを受けました。この「におい」は何とも言えないもので、磯臭く、なおかつヘドロのようなにおいもする。今まで体験したことのないようなにおいでした。

そんな強烈な場所には、工事の車が忙しく走っているのみで、人が生活している様子はありませんでした。震災前には、沢山の人が住み、子どもたちの笑い声や、人の行き交う様子など、当たり前のあるふれた生活の日々がここにもあったと思うと、あまりにも悲惨な状態に悲しみが込み上げてきました。「ごわいなー」と言ってその場に立ち尽くしていた娘の姿は、今でも目に焼き付いています。

ある立て札には、〇〇薬局跡地と、名前が二名分書いていま





した。その下には、連絡場所が書いていたのですが、よく見ると、「二人はまだ見つかっていません。」と書いていました。

がれきは少しずつ取り除かれています。被災者の方の悲しみは全く取り除かれてはいないと思います。がれきを置いておく場所がないのと同じように、やり場のない思いをひそかに胸に秘め、復興のために頑張っておられるのだと

思います。

この現状を見て、しみじみと思うことは、「当たり前病」になっただけではないということ。今の生活、朝起きて、朝ごはんを食べて、学校へ行き勉強をして、クラブ活動をする。帰ってご飯を食べて、お風呂に入って、布団で寝る。今は当たり前前と思っている生活が、いつなくなるかわからないのです。東北の人たちもまさか自分たちがこうなるとは思ってはいなかったと思います。私たちの中には、今の生活に喜びや幸せを感じないで、不満ばかり言っている人がいると思います。一度考えてみてください。今の幸せを。今できることの幸せを感じてください。できなくなってから、後悔しても遅いのです。

あと、東北で頑張っている人たちのことは忘れないでください。皆さんが震災を覚えていることが何よりも被災地への応援になります。そして、みんなが幸せに生活できる世界をつくるため「絆」を大切にしましょう。

「坊 守 の ひ と こ と」

坊 守

3月11日に東日本大震災がおこってから次々と報じられる被災地の模様は阪神大震災の何倍もの被害。その被害の大きさに私は胸をしめつけられる思いを味わっていました。同じ人間として深い悲しみを体験した者として、悲しみを共有することぐらいしかできない私ですが、いつか現地に行かなければ・・・という思いがありました。二男からの誘いを受けて、やっと10月に入って仙台石巻に行くことができました。三男が現地の小学校に赴任中ということもあり同行してもらいました。

被災地の現実には想像を超えるものでした。親鸞聖人がこの惨状を御覧になられたら、どのように受け止められたのでしょうか。

今、思い返してみることがあります。私が17年前、阪神大震災で形のあるものをすべて失ってしまったにもかかわらず、どうしてそれほど大きな悲しみに打ちひしがれなかったのでしょうか。今まで積み上げ、作り上げてきたもの、思い出の品々等々、すべて灰になり、身につけるものすべてがなくなってしまったのに。

確かに家族全員無事ということが第一の大きな安心でした。また、大勢の門信徒さま、友人、各地のお世話になった人たちからの励まし、お見舞いもどんなに力づけられたことでしょう。

でも、私を救ってくれた一番の大きな力は、やはりお念仏でした。お念仏は焼けなかった。くずれなかった。私は一人ではないんだ！いつも阿弥陀さまが一緒、いつも見ていてくださるのだ！

「われら凡夫は絶えず心ゆらぐ。迷う。くじける。念仏はそういう凡夫の心をそのつど立ち直らせてくれる光の知らせではないか。阿弥陀仏は心の闇を照らすかぎりない光と感じられるほうが、わたし(親鸞)にはありがたく、うれしく思われるのだ」(五木寛之「親鸞」神戸新聞に連載中)

五木さんが親鸞をとおしていられているこの「光」こそ、今まで私を支えてくれているものだと確信しました。

仙台の被災地を目の当たりにしてお念仏もうすばかりです。

合 掌

「写経しませんか」

写経がブームになってきているようです。

パソコンや携帯メールの普及により、手書きが少なくなるこの頃でしたが、意外と人気があるそうです。お経のことばをひたすら、なぞるうちに心が安らぐ気がいたします。

さてこの度、須磨区、長田区の26ヶ寺で東日本大震災の義援金を募るにあたり『正信偈の写経用紙』を作成いたしました。1部500円でお配りしています。

写経紙の御志納金を被災地への義援金とさせていただきます。

どうぞ、お一人様でも御家族でも必要な部数を信行寺まで お申し込み下さい。

また、独りで自宅では、なかなか出来ないものです。信行寺では、写経の会を開き、お寺で写経が出来るようにいたします。

来年 4月8日には、それを納める納経法要も予定しております。

皆様のご協力の程、お願い申し上げます。

両親が残してくれたもの

多田 清子

朝日新聞の「生活」のページに「両親が残してくれたもの」と言う記事が載っていました。

「父と母が六日違いで相次いで旅立つてから早十一ヶ月が経つ。一度に二人とも逝かれてしまって、心に空いた大きな穴はなかなかふさがってはくれない。二人の写真に話しかけていると、確かにもうここにはいないのだけれど、でも、いる、と感じられることがある。二人から教えられた沢山の事、注がれた愛情をまだ感じられるからだろうか。元氣だった父は心臓まひで突然亡くなり、最後の別れもできなかった。母は闘病の末亡くなった。

息を引き取ったとき、私は心の中で、

あなたはあなたの人生を本当によく生き切ったよね、と語りかけていた。」

そして思い出された言葉があったそうです。

「人が死後に残すことの出来る最大の財産は、実はお金や事業などではない。最大の財産とは、その人自身が自分の人生を真摯に生き切ることである。

真摯に生き切られたその人の人生それ自体が、人類にとっての最大遺物である。」

と言う内村鑑三の言葉でした。

「ああ、一人が亡くなった時に私が感じた気持ちはこういう事だったのか、と心にストンと落ちる思いだった。私も還暦を過ぎ、あと何年生きるのかは分からないが、自分の人生を私なりに真摯にしっかりと歩んで行きたいと思う」と書かれていました。

これを読んだ時、私も親を亡くした折りに、大変であったらうと思われる人生を最後まできちんと生き抜いて偉

いなあ、と感じた事を思い出しました。私はこの様に生きて行けるだろうか？と疑問に思ったりしました。

かと言って何を勉強する訳でもなく日々の暮らしに明け暮れ、漫然と暮らして来ました。

ところが少し前から、信行寺さんで行われている「定例聞法の集い」や「法要」の時等で、法話を聴聞させて頂く機会に恵まれました。

歩いて行く方向すらはっきりしていなかった私がこれからしっかりと学んで行けると思えるこの縁を、心から有難いと思っております。



自分が正しい？

ある時、かい君は、りく君にコップを渡そうとしましたが、落ちて割れてしまいました。りく君は「お前の渡し方が悪い」といい、かい君は「お前の受け取り方が悪い」とケン力になってしまいました。

その週末、かい君は大好きなおじいちゃんとおばあちゃんの家遊びに行きました。夕食の時、茶碗が落ちて割れてしまいました。

おじいちゃんは「いや、すまん。ついよそ見をしてしまった。悪かった」と言いました。

おばあちゃんは「こちらこそ、ごめんなさい。ちゃんと渡せばよかったのよ。大丈夫だった？」と言いました。この様子を見たかい君は、自分のことが恥ずかしくなり、今度りく君に会ったときあやまろうと思いました。

ケン力をする時は、お互いに「自分が正しい」と思っています。一方、相手を思いやり「自分が間違っていた」と思う人はケン力をしないのです。

(いづれも仏教新聞より)

米田光輪ちゃんの絵



馬にのって

そよそよと風が吹く

きもちいい光が

キラキラとかがやく

青い大きなきれいな川が

光でキラキラときらめいている

わたしは

その水をさわってみた

冷たくてきれいだった

ああ、なんてうれしいんだろう

ああ、なんて気持ちいいんだろう

こうりん

「本山念仏奉仕団」に参加して

畑 早苗

今回で二十八回目を数える「念仏奉仕団」に十月二十七、二十八日の両日、参加させて頂きました。

一日目は、御影堂で開会式のあと、阿弥陀堂の内陣を除く畳と廊下を参加者全員で拭き掃除。それから百華園で御門主様とのご面接、記念撮影がありました。書院の対面所に於いて抹茶の接待を受けました。続いて書院を拝観。今までは、写真で見えていた欄間、障子画が目の前にあって、感動いたしました。

二日目は、朝六時に始まる晨朝法要に出席、御影堂に移動して「正信念仏偈」のお勤め、朝の法話と続き、御文章の拝読で終わります。早朝の静寂の中で堂内は皆様の唱和する声に包まれます。今年もこの場に身を置く事ができる機会を与えられましたことに感謝いたしております。

安穩殿で日程説明、親鸞聖人の御生涯を描いた「親鸞聖人伝絵」の解説。その後の百華園の清掃は、里山で落ち葉を集めているようで、御本山の広さと自然にふれた思いです。

奉仕団に参加された有志の方々前列、左から二番目が畑さん



午前中で全ての日程

を終え、昼食のあと

「龍谷ミュージアム」で「釈尊と親鸞」を見学しました。インドで生まれた釈尊による仏教の誕生、中央アジアを経て、日本に伝来するまでの道、日本での仏教の広がり、展示された阿弥陀如来像のお姿など、もう一度ゆっくりと拝見したい思いです。

有意義な二日間を

有り難うございました。

毎年、参加者を募っています。来年もたくさんの方々参加を心よりお待ちしております。

信行寺行事予定とご案内

報恩講法要

十二月十七日(土) 住職

十八日(日) 天岸浄円 先生

二日間とも午後二時より四時まで

ご都合の良い日に合わせて、一日でもお参り下さい。

尚、両日、門信徒の浜尾千代子様作品「押し花額」

「手作り手芸品」が展示されていますので、ご覧下さい。

新春初法座

平成二十四年一月五日(木)

午後一時より 本堂にて

お正月をお寺で楽しく迎えましょう

お勤め、法話の後、みなさんで

楽しく語らいながら、ご馳走を

いただきます。(お世話の方々

が手作りのおいしい料理を持ち

寄ってくださいます。)



編集後記

この一年はとても長かったように思われます。まさにたくさんの事が起こりました。

私達の足下をすくわれる、そんなニュースの連続でありました。

多感な子供達は「なにを信じていいのかかわからない」と思っているそうです。そのとおりかもしれません。おそらく大人でさえも一日一日を生きるのがやつとに見えていることでしょう。

けれど、一日一日を大切に生きる。そのことがとてもリアルに感じられる一年でありました。

独りでは生きられない私達、今日ある命の有り難さに気がつき、素直に感謝できることこそ尊い。

「なにを信じていくのか」今一度、家庭で子供達に伝えていきたいと思いました。

どうぞ、年の瀬であります「報恩講」にお参り下さい。

ご家族でお寺に参り一年を振り返り、互いを敬い、お念仏を慶びましょう。

(米田 悦子)